

関西学院千里国際中等部

2025 年度 入学試験問題

# 国語

- ・ 問題は 7 ページ、解答用紙は 1 枚あります。
- ・ この冊子と解答用紙に受験番号を書きなさい。
- ・ 字数制限のある場合は、「、」「。」もふくみます。

|      |  |
|------|--|
| 受験番号 |  |
|------|--|

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「優希」と「誠」は、中学2年生の学級委員だ。クラスで体育祭のスローガンを決めることになっているが、クラス対抗リレーの結果を気にする生徒の意見のみで決まりそうな事態にヤキモキしている。そんなある日、今年明星女学院から転校してきたばかりの「愛」に偶然川原で出会った。クラスの状況に同じ思いを持っていた「愛」は、二人に自分のこれまでの学校での体験から感じたことを話してくれた。

愛は一度シンコキユウをすると、続けた。

「さっきも言ったけど、みんな違ってみんないい、はずなのにね。学校って校則みたいに見に見えるルールよりも、①同調圧力みたいに目に見えないルールの方が、意外とやかいだったりするかも」

「同、調、圧、力」

誠が区切りながらフクシヨウした。優希が大きくうなずく。

「それぞれ違うことを考えていたり、思っていたりするはずなのに、みんな意見を言わないよね」

愛は背中をベンチの背もたれにあずけ、続けた。

「こう言ったら、あの人になんて思われるかとか、嫌われないかとか心配ばかり。ま、自分がそうだったから分かるんだけど。②本当は、三十五通りの心があるはずなのに」  
愛の言葉は、優希の痛いところをぶすりと突いた。

人にどう思われるか、いつも先回りして考えてしまう自分の心を、見透かされているみたいだった。

「同調圧力があつたとしても、思ったことを、感じたことを、ちゃんと言うことが大切なんだね」

優希は胸に両手を重ねて、自分自身に言い含めた。

③透明なルールってさ」

「透明な、ルール？」

愛の言葉をなぞった。新たなワードが、心の中をすつと切り開いた。何かをつかめそうな予感がする。

「ああ、同調圧力とかの、目に見えないルール。同調圧力は確かにあるんだけど……」

愛はそこで切って、考えるように首を傾けた。

あるんだけど……？

優希はじつと、その続きを待った。

「透明なルールって、同調圧力だけじゃないって今になって思うんだ」

「どういうこと？」

④思わず前のめりになってしまい、あわてて愛から体を離す。

「明星女学院のときに、日本ジュニア数学オリンピックを勧められたとき、目立ちたくないから、わたしは頑なにコトワったでしょ」

「うん」

「でもあれって、みんなの反応を勝手に決めつけていたのかも知れない。透明なルールで、自分で自分を縛っていたんじゃないかって」

★「ごめん、よく分からない」

「あのとき、もし、ジュニア数学オリンピックに出ようとしたら、マアやたちはひよっと

して、いっしょに喜んでくれたり、応援してくれたりしたんじゃないかって」

「それはありだよ」

誠が <sup>d</sup>相づちを打った。

「だからね、あのとき、同調圧力なんて本当はなかったかも知れない。自分が自分に作ってしまう、透明なルールに、縛られていただけかも」

——自分が自分に作ってしまう、透明なルール

気付いたら、優希は少しの間、息を止めていた。

愛が帰ったあとも、優希と誠はしばらくベンチに座っていた。

「この風景、なんか新鮮しんせんだなあ」

誠が声をもらった。見慣れているはずの風景の、何が新鮮なんだか不思議だ。

「え、なんで?」

優希は誠の顔をのぞいた。

「僕の家はこっち側だけど、橋をわたるとたいていは、そのまますすぐ家に帰っちゃうんだよね。だから川を眺ながめるときって、いつもなぜかあっち側からなんだよね」

「うんうん、荻野くんのお気に入りに入リスポット、あっちだもんね」

優希が向こう岸に視線を向けた。

「だから、川は左から右に流れていたんだ。こっちから見ると、右から左に流れてる。

あ、そんなのあたりまえか。自分で言ってる A 鹿みたい」

誠が自分の頭を B つかみにすると、優希は首を横に振った。

「違うよ。あたりまえすぎて、誰も気にも留めないことを新鮮だと感じる、荻野くんの感性が素敵なんだよ」

「いや、そんな……」

誠はもじもじしている。

優希は川の流れを眺めた。

川は右から左に流れている。同じ川でも向こう側から見れば、左から右に流れている。

もし川の中に立っていたとしたら、左右なんか関係なくて、川上を向けば川の流に逆らうし、川下を向けば流れに押おされる。

⑤川は変わらず静かに流れているだけなのに。

太陽が下流の方の住宅街の中に姿を落とした。住宅のでこぼこした影かげが、シルエツトのように浮かびあがった。ひんやりとした風が、ふたりのうなじをなでていく。

「さ、そろそろ帰ろっか」

誠がベンチからおもむろに腰こしを上げた。

「そうだね」

優希も立ち上がった。

「あっ、忘れてた」

誠が声を上げた。また何か忘れ物でもしたのかと、優希は誠に視線を滑すべらせた。

「体育祭のスローガン!」

誠の言葉に、両手で頬ほを押さえた。

(中略)

五時間目のロングホームルームが始まった。

辛島先生は最初だけ教卓で、

「この時間は、前回から持ち越した、体育祭のスローガン決めをするので、荻野さんと佐々木さんに進行をお願いします」

と話すと、オブザーバーに徹するように、教室の後ろのロッカーのところまで下がった。優希は誠を振り返って目を合わせると、同時に席を立てて教卓に向かって歩いた。

両こぶしに力を込めると、優希は口Cを切った。

「では、体育祭のスローガン決めを行いたいと思います。前回の話し合いでは『必勝』と『心ひとつに』という案が出ましたが、なにか新しいアイディアを考えてきてくれた人はいますか？」

優希の問いかけに、⑥クラスみんなは目をそらすように、机の上を見たり首をひねったりしている。

「だーかーらー」

流星の大声が響く。

「田中くん、発言はキョシュ願います」

優希がたしなめると、流星はだるそうに「はい」と手をあげた。

「田中くん、お願いします」

誠はDのように押し黙ったままで、ひとことも口を開かない。

「前のときも言っただけで、このふたつを合体させてさ、『心ひとつに必勝』でよくね？ さっき全員リレーの練習で一位になったの、超盛り上がったじゃん。心ひとつに

優勝目指してさ、感動したわけじゃん」

流星が言うと、野球部員だけでなく、瞳子や他何かが、小さくうなずいている。でも、おおかたの生徒は反応がなく、賛成なのか反対なのか分からない。

（中略）

「他に意見がある人はいませんか」

「意見が出ないようなので、わたしからも意見を言ってもいいですか」

何人がうなずいてくれた。

優希はつばを飲み込もうとしたが、口の中はからからで喉が引きつれた。そつと下を向いて、左の手のひらに目を落とした。ボールペンで書いた文字をあらためる。

よし、言うぞ。

「『心ひとつに必勝』。たしかにそれは、体育祭はクラスで得点を競う面もあるから、みんなで優勝を目指すというの、ありだと思います」

ここで区切った。流星や瞳子たちが、でしよ、というようにうなずいている。

「でも、」

⑦喉がむずがゆくなって、咳が出てしまった。喉もとを手で押さえつけた。誠が上体を少し倒して、優希の横顔に視線を送った。

頑張れ、とエールを送ってくれている。

「でも、わたしのスローガンの案は、Eです」

（佐藤いつ子「透明なルール」作問の都合上、一部改変）

注 スローガン…行事の目標となる短い言葉。

オブザーバー…話し合いには参加せず、見るだけの人。

問一 ― a e のカタカナを漢字に直し、漢字はひらがなに直しなさい。

問二 ― 

|   |
|---|
| A |
|---|

|   |
|---|
| D |
|---|

 に入る言葉を次から選んで、記号で答えなさい。同じ記号は二

度使用しないこと。

ア 水    イ 木    ウ 火    エ 貝    オ 馬    カ 鳥    キ 髪  
ク 糸    ケ 草    コ わし    サ 魚

問三 この物語に出てくる「優希」「誠」の姓(みょう<sup>せい</sup>字)を本文からぬき出して漢字で答えなさい。

問四 ― ①「同調圧力」がかかっている状況として最も適切なものを次から選んで、記号で答えなさい。

ア 私と彼女はお店に並ぶ同じものを見て、同時に「わ、きれいだねー」と叫<sup>さけ</sup>んだ。  
イ 私と彼女は小学校から一緒だから、食べ物好みまでそっくりになってきた。  
ウ 同じグループの一人が「A君が嫌い」と言うと、私はA君と話しづらくなった。  
エ 同級生の女の子と同じ人を好きになってしまったから、何だか気まづくなった。  
オ 運動会では、いつも仲間意識を高めるためのクラスカラーが決められている。

問五 ― ②のセリフにおいて愛が言いたいことは何ですか。最も適切なものを次から選んで、記号で答えなさい。

ア 他の人が考えていることは簡単<sup>かんたん</sup>には変えられない。  
イ みんなが同じ考えて自分を見ているわけではない。  
ウ 自分がどう考えようが他の人には全く関係がない。  
エ 他の人がどう考えようと自分の考えは変わらない。  
オ どんな事を言っても反対する人は存在してしまう。

問六 ― ③「透明なルール」とは、どういうものだと「愛」は考えていますか。次の文の 



 に入る言葉を、指定の字数で本文からぬき出しなさい。

透明なルールとは、他者から受ける「同調圧力」だけではなく、

|         |
|---------|
| I (十五字) |
|---------|

 しまう 

|         |
|---------|
| II (二字) |
|---------|

 の問題でもあるということ。

問七 ― ④には、優希のどのような気持ちがあらわれていますか。説明しなさい。

問八 ― ⑤「川は変わらず静かに流れているだけなのに」において、「優希」はこの川の有り様から、★「ごめん。よくわからない」と答えた時にはわからなかった何かに、気が付いたと考えられる。それは何ですか。「人」という言葉を用いて説明しなさい。

問九——⑥における、クラスメイトの気持ちはどのようなのですか。その気持ちを説明している部分を、解答用紙に合う形で、本文から三十五字以内でぬき

出さない。

問十——⑦の気持ちに合う熟語を次から選んで、記号で答えなさい。

ア 恐怖 きょうふ    イ 緊張 きんちやう    ウ 悪寒 おかん    エ 我慢 がまん    オ 憎悪 ぞうお

問十一——E には、優希の考えたスローガンが入る。優希の主張に合うスローガン

を考えて答えなさい。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

きみにとって、学校に行くことは「普通」ですか？

「明日、学校に行きたくない」そんな気持ちになることはだれだってありますよね。

とはいえ、みんな学校に行くし、学校に行くことは当たり前なんだから、と①気合を入れて通学している子もいるでしょう。

「学校に行くのは普通のことなんだから、I 言わないの」と親に言われることもあるかもしれませんね。

そんなふうに、「これが当たり前」「これが普通」という言葉が 2 とき、ちょっと立ち止まってみてください。

学校に行くことは「普通」なのか？

トモダチが**a**いっぱいいることが「普通」なのか？

背が低い、または高い自分は「普通」ではないのか？

そんな問いかけをしてみてもいいのです。そして②「当たり前」や「普通」という発想は一体どこから来ているのか、★「普通」に合わせる**b**ことが自分の幸せになるのか？と考えるを進めてみてください。

A 、「きみが本当は学校に行きたくないという思いを抱え、不登校**か**きみになったとき。」「普通から外れてしまった」と、自分に不安やあせりを感じることがあるかもしれません。

**B** わたしが子どものころには、学校に行くことが当たり前だと、だれもがうたがっていませんでしたし、学校に行けない子は不思議に思われることもありましたが、「学校に行けなくなったら、人生のレールから外れてしまう」、そのように思われていた時代でした。

小学校、中学校、高校に通い、いい成績をとって偏差値の高い大学に行き、大企業に就職する、という流れが「幸せ」であった時代には、学校へ行くことが「普通」だったのです。

**C** 時代が変わり、学校に通い続けた先に、絶対的に安心な未来があるとは限らないと気づく人が増えました。昭和、平成時代の「普通」は現代には合わなくなってきたのを感じる人は多いでしょう。

わたしたちは「普通」という基準にそっているか、そっていないかで自分を評価していますが、実は「普通」というのは、そのときどきの社会が作りあげたひとつの基準です。時代の変化によってまったくちがう形にもなりえるものなのです。

学校に行くことが普通という考えも、大きな変化をむかえています。通信制の高校に進み、学習は家でしながら、自分がやりたい活動に時間を使う人もいます。大学在学中に<sup>C</sup>キギョウして、会社が軌道に乗ったから大学はやめるという人もいます。学校へ行かない選択<sup>せんたく</sup>をして、パソコンなどで独学をしながら、自分の行き先を自由に見つけていく人もいます。

③これまでの「普通」からはまったく外れているものの、自分の生き方を見つけてい

きいきと人生を歩<sup>d</sup>んでいる子どもたちに数多く出会ってきました。

多くの人が「普通」と考える定義は、ひとつの大きな価値基準ではあるけれど、絶対的なものではありません。世間にとっての「普通」の幸せと、自分にとっての幸せはまったく<sup>e</sup>別物<sup>べつぶつ</sup>なのです。

違和感<sup>いわかん</sup>を覚えたときには、それをなかったことにして「普通」になれるようまわりに合わせるのではなく、普通にはなれないと自分を否定しないで、「普通とはなんだろう?」と、自分の幸せについて考えてみてください。

「普通」「当たり前」に違和感を覚えたら、その方法は自分の幸せとはズレているというサイン。違和感は「自分にとっての幸せとは何か」を考えるチャンスなのです。

きみの幸せが「普通」とちがうなら、自分だけの幸せの方向をさがせばいいだけ。普通を問い、④自分の幸せにアンテナを立てていけば、きみだけの幸せをかなえる場所を見つけることができるでしょう。

(前野マドカ「きみだけの幸せって、なんだろう?」)



